

とうほく 一番物語

104

レコード針生産世界一(東根市)

歌詞に登場するナガオカこそレコード針の代名詞。アナログ世代には懐かしいこの針は、東根市にある「ナガオカ」が作っている。今では国内唯一のメーカー。世界でもスイスとこの2社しか残っていない。相手先ブランドによる生産(OEM)も含め国内外へ年間240万本を供給、世

シェア8割強

「ザブスクリプション」まで分かんねえ、ナガオカ針しか記憶にねえよ。桑田佳祐さんの新曲「ヨシ子さん」。ウェブ配信ミュージックに行けないおっさんが、レコードで曲を聴いていた昔を懐かしむ。

ナガオカ 愛好家頼みの綱

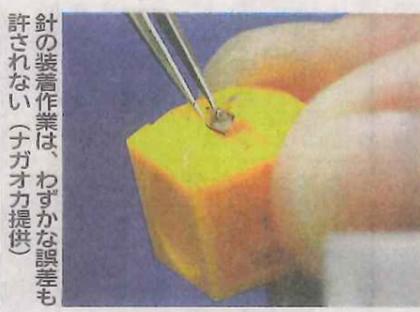


長岡香江社長(43)は「全て

ダイヤモンドで作ると値が張り、量産できない。つなぎ目が絶対に外れない技術は、世界のどこにもない」と胸を張る。

作業だ。「針の装着位置が1ミリ違っても不良品になってしまう」。キャリア10年の増川裕子(35)は、全神経を指先に集中して顕微鏡をのぞき込む。

「ここ数年、温かみのあるレ



針の装着作業は、わずかな誤差も許されない(ナガオカ提供)



顕微鏡とピンセットを使った組み立て作業。熟練した技術と研ぎ澄まされた感覚が求められる＝東根市のナガオカ

元々は機械式時計の軸受け石を作っていた。精密加工技術に秀で、戦後、蓄音機のレコード針を求める米進駐軍の依頼を受けて製造を始めた。ダイヤモンド接合針の生産開始は1973年。75年に大ヒット曲「おかげ！たいやきくん」が発売されると、生産は月120万本に達した。しかし、82年のCD発売以降に10万本を切るまで落ち込む。東京本社は90年に解散。生産工場だった東根市の子会社を存続させ、主力の宝石や超合金などの微細加工を手掛けたが、針の製造はほそぼそとでも続ける判断をした。「針がないとレコードが聴けない。他社が撤退してもレコード文化を絶やしてはいけない」という当時の社長の強い思いが、この道40年のベテラン齋藤勝子(60)は「先輩から受け継いだ技術を守り、若い人に確実に引き継ぎたい」と話す。

「ちりちりノイズも味」。愛好家らが連日集い、約2万2千枚の収蔵品から思い出の曲を選んで試聴している。サロンを管理する菅野昭義さん(66)は「ナガオカ針は感度がいい。レコード文化を残す上で心強い」と話す。文 生活文化部・足立 裕子 写真も



ナガオカ製の針がレコード盤の溝をトレースし、曲にまつわる思い出をよみがえらせる＝天童市の天童レコードサロン

くつろぎサンデー

5	1
6	8
9	4
8	2
3	6
4	7
7	3
2	9
1	5

みやぎ ジュニア スポーツ Vol.115

第23回河北カップ仙台市スポーツ少年団サッカー大会 仙台中田 16年ぶり3度目V



第3位のFC ASK

ASK・橋本選手「大会では3点しか取れなかった。守

2	0
大野田	